慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一一〇号）

目次

帰命の一念……近角常観…(1)
韋提希夫人……福島政雄…(4)
—仏教の女性観—
橘地翁と私……柳瀬留治…(8)
心に刻まれたことども……花田正夫…(14)
正信偈私解……白井成允…(17)

第十卷　第五號

愛知県桑子、妙源寺。光明本尊中の御影。

帰命の一念（二）

近角常観

其処で私は常に言ふのでありますが、茲が実に有難いのである。度々申す『涅槃経』の御言葉に

如来は一切の為に常に慈父母と為り給ふ。

当に知るべし、諸々の衆生は皆これ如来の子なり。

世尊の大慈悲、衆の為に苦行を修し給ふこと、

人の鬼魅に著せられて、狂乱所為多きが如し。

我々が色々悪い心のために惑はされ、狂はされて居る有様を見てて下さる親の御心は如何に。我々が間違ひをすればする程、親はいよ〳〵その者を不憫に思召し下さるのである。親が子供の悪いことをするのを、仕てもよいと眺めて居るといふ事はない。さりながら、親の目から御覧下さると、色々の悪魔に狂はされて、子供はあんな事をして居るのである。当り前であんなことをする筈はなけれども、悪魔に迷はされてあんな事をして居るのである。それが実に哀れで仕様がないと、こちらが悪しければ悪しき程、大悲の親は遺る瀬なく思召し下さるのである。如来本願の起りは実にここである。ここを頂くと、この外に他力真宗の教は無いのである。そこを『和讃』で頂けば

如来の作願をたづぬれば　苦悩の有情をすてずして

廻向を首としたまひて、　大悲心をば成就せり。

我々は皆、斯く煩悩の悪魔に狂はされて、狂人になつて居るのであります。『歎異鈔』の中には茲の処を

しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、云々。

天におどり地におどるほどによろこぶべきことを……

よろこばせさるは煩悩の所為なり、云々。

また浄土へいそぎまゐりたきこころのなくて……死なんずるやらんと心細くおぼゆることも煩悩の所為なり。

皆これである。而して聖人の『三心釈』にお示し下されたのが即ちここなのである。初めにも一寸申したのでありま

すけれども、聖人の『信楽釈』の御言葉に、

然るに無始よりこのかた、一切の群生海、無明海に流転し諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信楽なく、法爾として真実の信楽なし。

即ち我々はする事、なす事、煩悩に狂はされ、無始以来浅間しき事ばかりして居るのである。それを見て、その浅間しいのが、大悲の眼より見る時は、何より不便なと言つて下さるのである。

無始曠劫より我々は、今日今時に至るまで、無明海にほだされて流転して居る私を、仏はその闇黒の心を知り抜いて、その者を飽くまで隔てて下さらぬ御まことである。こちらは遁げて廻るのを飽くまで追ひ詰めて下さる仏の御まことである。

この如来の、このまことならざる私を、飽くまで見捨てて下さらぬ御親切の為に、今迄人を隔て苦しんで居た私の心の上に、今まで浅間しき事ばかりして居た私の胸の中に、あゝ長々仏は、夫れ程までに、此の私を思召し下されてあつたのか、実に申訳がなかつたと分らせて貰へるのである。するとこの一念に、あゝ今まで自分は間違ひ無いと思つて居たが、実に相済まなかつたと、ここが一念帰命の有難い処であります。

○

そこで我々が、大悲の親心を聞かせて貰ふのは、ここの処を聞かせて貰ふのである。であるから是処にお集り下されてある皆様は、皆十人十色の思召を持つてお出でになるのでありますが、この仏の遺る瀬なきお慈悲を頂く時、若し自分の色々の思ひを、仏はこれを知つてて下さるのだと、自分でさうして居るのだといかぬのである。「自分のこの苦しい心中を誰か同情して呉れぬか、仏が同情して下さるかな」と軽い事になつてしまつては駄目なのである。それでは仏の大悲を、障子一重へだてて眺めて居る気持になり、私の浅間しき胸の中を直接遺る瀬なく思召し下されてある大悲のお心が頂かれぬ。「その者を遺る瀬なく思ふのぢやぞ」とは、仏よりして言つて下さるのである。仏がさう思うてゝ下さるのであると、こちらより無理おしつけに押しつけて居るのでは駄目である。

大低の人が言はるるには「仏のお慈悲は有難い、私如き者をお助け下さるのである」と、かう云はれる。斯る人に向ひて多くの場合、私の方よりその人の苦しき処を言ひ当てる。「あなたは斯く〳〵の浅間しき心が起りて、人にも言へず心配して居るのだらう、あなた方の苦しんで居る心は、かうであらう、あゝであらう」と、斯く私の方から先きに其の人の心を言ひ当てる。その言下に、言ふのは私の口より言ふなるも、大悲の親様より直き〳〵に

「汝はかういふ心があるのであらう、かう云ふ遠慮があるのであらう。その心のあることを、我は疾くより知つて居る。その隔て心が取れぬであらう。浅間しき思ひがやまぬであらう。そのため生きて居れぬ程に苦しむ汝の胸の中は、我能く知つて居る、知つて居ればこそ、その汝を可哀想に思ひ、親はこれ程に呼ぶのではないか」

と、言つて下さる遺る瀬なき親のお心を、斯く言ふ私の言下に、直き〳〵に頂いて御安心なされるのである。

先日も石州の或方が、木辺の御遠忌に参詣して私に申さるるには「それでは仏は私の心を知つてゝ下さるので御座いますか」と、知つてゝ下さる段ではない。知つてゝ下さればこそ阿弥陀仏の御本願は現はれたのではないか。

私の善く出来ぬ根性、夫れを知つて下さればこそ、その善く出来ぬが可哀想ぢやと言つて下さるのである。我々が仕様なき心の中を御存じ下さればこそ、仏より賜る御慈悲なのである。

知るも〳〵一通りの知り様ではなく、我々が気の付くよりも、ずつと昔に、仏かねて知ろし召し下されて、夫れが可哀想で堪えられぬとあるが、仏の御心である。すでに十劫の昔に仏は現はれて、そのまことならざる汝の胸の中が、黙つて見て居られぬとある遺る瀬なきお心のままが、本願招喚の御呼び声なのである。

然るに我々、これを聞かせて貰つて「それでは仏は知つて、下さるんだな」と、これでは仏の仰せを頂いたのてはなく、自分の方よりさう思うたのである。

それでは仏の遺る瀬無き思召の程は何処で頂くのかといふに『執持鈔』の中に、

平生のとき、善知識のことばのしたに、帰命の一念を発得せば、そのときをもて娑婆の終り、臨終と思ふべし。

此方より、仏がさう云つて下さるんだなと頂くに非ず、その者を遺る瀬無く思ふとある、その大悲直き〳〵のお言葉の下に頂くのであります。

未完

近角先生愛唱歌

跡戻り〳〵して辿る哉
甲斐なきことに心惑ひて

韋提希夫人（二）

――仏教の女性観――

福島政雄

それから御承知でありませう。あの『玉耶経』といふお経を見ますと、これはまた玉耶といふ仕様のないお嫁さんであつたものを釈尊が非常に懇切にお説きになつて、すつかり心を改めさせられるといふお経でありますが、玉耶はその夫に仕へる道をも知らず、自分の容貌の美しいといふことをたのみにして、我儘放台をやつてゐた。それが釈尊の教をきくのであります。初め釈尊が女といふものはこういふ悪いところがあると、悪いところを沢山ならべ立てて、然しまたこう云ふいい所もあるといふことを説かれ、非常にねんごろにお説きになりますうちに、玉耶といふ我儘一杯であつたお嫁さんがすつかり心を改めるのであります。

あゝ云ふ『玉耶経』といふのは、これはまあ仏教のお経のうちでは非常にねんごろな女性訓と申しますか、女に対しての釈尊の御教訓であるわけでありますが、極端に悪い女が非常によくなるといふ、さういふことでありますからして、そこに実際この釈尊の実際の上で、悪い所を一杯持つてゐる女であるが、それが転じて来ると、非常にいいものになるといふことを現実の上でお示しになつてゐるわけであります。それだから、仏典に女性を女人といふものを非常に悪く云つてある、その釈尊のもと〳〵のお心持といふものは解るのであります。

それから華厳経、法華経も、すこしかぢつたりして居りますが、例の華厳経の善財童子と云ふ少年が、五十三の善

知識を次、次にとたづねて道を求めて行くといふ、あの物語の五十三人の善知識の中には種々な女性が現れて来るのでありまして、終り方近く、大事な地位を代表して居りますところの女性には、結婚の理想を説いて居る人があります。それから仏様のおさとりからもう一歩手前といふ、等覚の位といふものを代表されてゐる善知識は摩耶夫人でありまして、つまり善財童子の求道の殆んど最後の大事なところに出て来られるのが、母親としての摩耶夫人である。然もその摩耶夫人は「一切の菩薩を産み出すところの母である」といふやうなことを華厳経には云うてありますからして、これは女といふうちでも、母としての女といふものを非常に高く尊く見てあると云ふことがそれでわかりますのであります。

それからもう一つはこの心地観経報恩品であります。このお経は例の父母の恩、衆生の恩、国王の恩、三宝の恩といふ四恩を説いてあるのであります。

一番初めにこの父母の恩をといてありますが、然しそこを読んで見ますといふと、父母の恩と云ひながら、母親のことばかり書いてあるのであります。母親のためにその御恩を報いようとしても、仲々その御恩に報いられるものではない。たとへば毎日三度々々自分の肉を割いてそれで親をやしなつてあげたといふことがあつたとしても、親の一日の恩を報いることも出来ない。一体我々が赤ん坊の時代に母親の乳をどれ位飲んだものかと考へて見ると、百八十石位は飲んでゐるといふやうなことを説かれまして、そしてそこに母親の姙娠中から、子供を産んで子供を育てるまでの種々な苦労をならべたてありまして、それから母親の徳といふものを十もならべ立てあります。

それだから、こんな所を読みますといふと、父母の恩と云ひながら、釈尊は母親ばかりしきりにお説きになつて、あんまり父親のことは殆んど言つていらつしやらん。チョト片手落ちではないだらうかといふ様な考へが、チョト私供、男でありますとおこりますことであります。そんなに父母の恩と云ひながら母親といふものを非常に大事に説いてある、さういふところを読んで見ますと、釈尊がどんな風に女といふものを見ておいでになるかが解るやうな心になるのであります。仏教の本当の精神はどう云ふところにあるかといへば、つまり非常な深いお慈悲の心持からして、その相手の悪いところを何処までも〳〵底の底まで自覚させ、知らせて、そしてその人間が転じて来るといふところを目指しておいでになる。これが釈尊の御心持であらうと思ふのであります。

私共凡夫としての男の立場から申しますといふと、これはまあ私の打ち明け話になりますけれども、二十歳前後の頃でありますと云ふと、女を非常にほめたたへてよく言つてあるものを読んだり、聞いたりいたしますといゝ気持がしたものであります。女といふものはこんなによいものかと、実際この青年時代の男子といふものは女をチトよく見過ぎるといふことがあるでありませう。私もその例に漏れずでありまして、イギリスのラスキン、文芸批評家なんか、あゝ云ふ人の書いたもの『胡麻と百合』といふのがあります。その百合といふ中に女を何とも云へず美しく見てあります、ほめたたへてあります。そんなところを私の若い頃には喜んで読みましたものであります。それから英国の詩人の恋愛をうたつた詩などありまして、そんなのに女性といふものを非常に美しく見てある。さう云うところに共鳴いたしたものであります。

そして徳川時代の女訓でありました女大学と云ふ様なものは、あれはいけないものだと、女に七つの悪いところがあるとならべたてある、あんなのはあれはいけないものである。今頃の女の教といふものぢやないと云つて、私の親父に食うてかかつたことがあります。その時に私の親父が申しましたのに

「政雄は今は若いからそんなことを考へてゐるが、いまに年をとつて来ると、この東洋の女訓といふものが余程意味のあるものであるといふことが解つてくる」

と親父が言つて聞かせたことを今もなほ覚えて居りますが、成程、私も四十歳を越え、五十歳越えて来ますといふと、成程、父の言うたことが本当であるといふやうになつたのであります。それぢやからと云つて、今頃女大学がよろしいと言ふのぢやありませんけれども、然しながら、悪く言うてあるところには大いに意味がある。それから男子としての経験からいたしましても私共は悪い女の人に騙されることもあります。そんなことがありますといふと、だん〳〵二十歳前後の頃にはあんなに女性といふものを美しいものと見て居つたけれども、今になつて見ると、チッと変つてきた。釈尊の仰言つたことが矢張り本当のやうに思ふといふこう云う感じになつて参りますのであります。

さうでありますからして、今頃もう七十にならうといふ年になりますといふと昔のやうに女性を讃美するといふ純な心持はもたぬのでありまして、随分批判的に見るといふ一面も何時の間にか持つやうになつて参りました。さうなつて参りますといふと、矢張り釈尊の教が本当だとなるのであります。

これがまた西洋のことを申しますれば、西洋の、たとへば哲学者でショウペンハウエルと云う方があります。こんな人は、唯女の悪口ばかりを言つてゐるさうであります。それから、オットウ、ワイニンゲルと云う思想家がありました。これも女のことを書いて、これは矢張り女の悪口を余程辛辣に云つてあるやうであります。けれどもただ悪口を言つてあるといふことだけでありまして、この女性の転じて来るところの大事な、いゝ一面といふものは云つてないのでありまして、さういふ風な西洋の思想家といふものは、例のショウペンハウエルは大分仏教の思想の影響をうけてゐる人ださうでありますけれども、矢張り小乗仏教の或一面の影響をうけたといふだけでありまして、どうも本当に釈尊の大精神に徹してゐないのぢあないかといふことを思ひますのであります。

それぢやからどうしても問題は、もう悪いところをつきつめて云つて貰つて、それから自分の心を転ぜしめて頂くと云ふ風の教が本当の教ぢやあないか、かういふ意味で仏教の教といふものが、さういふ方面から見ても大変有難いものであるといふことを思ひますのであります。

未完

× × ×

松庵寺

高村光太郎

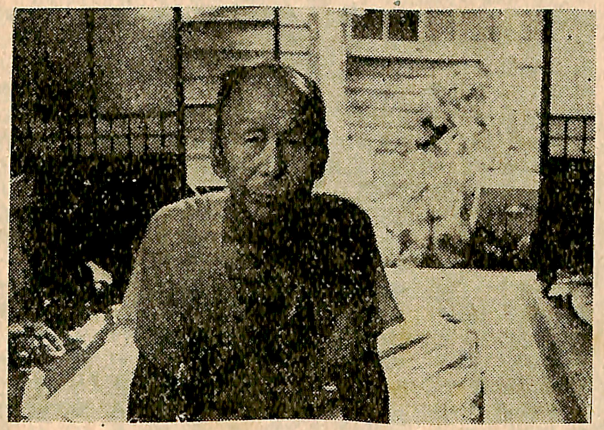
奥州花巻といふひなびた町の
浄土宗の古刹松庵寺で
秋の村雨のふりしきるあなたの命日に
まことにさゝやかな法事をしました
花巻の町も戦火をうけて
すつかり焼けた松庵寺は
物置小屋に須弥壇をつくつた
二畳敷のお堂でした
雨がうしろの障子から吹きしみ
和尚さまの衣のおそさへ濡れました
和尚さまは静かな声でしみじみと
型どほりに一枚起請文をよみました
仏を信じて身をなげ出した昔の人の
おそろしい告白の真実が
今の世でも生きてわたくしをうちました
限りなき信によつてわたくしのために
燃えてしまつたあなたの一生の序列を
この松庵寺の物置御堂の仏の前で
又も食ひ入るやうに思ひしらべました

「智恵子抄」より

念仏往生を遂げられた

橘地亀次郎翁と私（一）

柳瀬留治



昭和卅一年夏。病床の翁

一

橘地翁は昨年十一月二日八十五歳で世を去られた。其節五首の悼歌を本誌に載せたことでした。翁に初めて遇つたのは前の求道学舎の食堂でお茶を飲み乍ら入信の喜びを聞いた時で、大正三年の夏頃でした。翁はまだ四十二才頃です。数へれば四十幾年間信仰の父とも頼む人でした。信仰上、人生上、親にも勝る導きを蒙つたのです。

翁は明治六年石川県に生れ、藤原家の長男ですが、九才で父に死なれて母の手で育ち、加賀藩士族の橘地家の養子となつたのです。身長五尺七八寸もの体格で長い八の字髭を生やし、濃やかな愛情を湛へた細い目をして居られた。

翁は徴兵で近衛の二聯隊に入り現役志願した方です。よく青壮年時の話をお聞きしたが、慥な所を求道第一巻三号（大正三年三月）に載せられた自筆の告白「仏智不思議をその儘に」により翁を語ることにしませう。

翁の生家も養家も真宗で仏道を喜ばれたが、自分にはそんな必要はないと思ひ、立身出世を神に禱り、十六歳から徴兵まで酒を口にせず、婦人に親まざる事を神に誓つたと云つて居られる。日清の役には二十八年に大連に上陸、更に台湾平定の軍に従ひ、大鼓の合図に急に湧いて来る裸部隊と戦つた話をよくされた。過ぎて三十七年の日露の役には小隊長として鎮南浦に上陸、九連城其他十数回の激戦の末、沙河の会戦で中隊の生存者三十名となり、奉天では夕闇に乗じ山上から敵が撃ち下し、部下の半数が倒れ、従卒の作つたメリケン粉袋の土嚢で弾丸を防ぎ、指揮中、流丸が橘地小隊長の脳天から耳に貫通し倒れた。従卒が引きずる様に背負つて繃帯所に行き「お願ひです、隊長を助けて下さい」と拝んだ。軍医は血を噴く頭部に繃帯して氷嚢を当てたが、昏睡から醒めると氷嚢の氷を飲まうとする。従卒は手を縛つて防ぐ、またも昏睡に陥つてしまつた。従卒は闇夜夢中に野戦病院に走り、懇願して院長を伴つて来た。時既に死体室に移されてゐた。診た院長は「残念だらうがもう見込みがない」といはれたが、従卒が泣くやうに縋つたので「このブランディを置いて行くから暁方に飲ませて見ろ。気がついたら病院に連れて来い。付かねば焼いてしまへ」といはれた。暁を待ち切れず飲ませた。ところが不思議にも意識を取り戻した。従卒は「助かつた助かつた、隊長が助かつた」と狂喜して大急ぎで中国人夫を雇つて来、二人で担架で病院へ運んだ。茲に橘地翁が蘇生し、やがて不思議な入信により信仰生活の展開を見たのです。

この従卒立花がつんぼなんです。さきに沙河の戦で砲声の為に聾になつた。ところが「病院にはいれ」と云つても「小隊長ッ、耳で戦争するのでないです。奉天戦に伴れていつて下さい」といふ。橘地小隊長大いに感激し中隊長に具進し、自らも当番兵にしたもの、それ丈に心を鬼にして看護し、夜はベットの下へ僭る時「用の時この紐を引いて下さい」と紐の一端を隊長の手に結び、一端を自分の手に結んで潜る。帰還後、未代迄の恩人として助川の立花に情を尽した。この美談はキング第十六巻第二号にも載つた話です。

橘地少尉は脳をやられ舌の利がぬのに「テーン」とか「バア」とか叫んだ由です。「天皇陛下万歳」を叫ばうとした由です。又松前節（追分節）をよく唄つた由。後で傍の人がいつたさうです。

やがて快方となり橘地少尉は内地へ後送され、赤十字病院で橘本軍医総監とベルツ博士の診察の際、橘本国手は「君の負傷はとても医薬の力で助かるべきものでない。全く神仏のお助けによるものである。大いに其の点を喜び決して不平をいふな」と言はれた。「その時は唯空事の如く考

へ何等感謝の念も起らなかつたが、今広大なお慈悲に触れて唯々有難く感謝に堪へない」と告白に書いで居られる。

二

翁は明治三十九年中尉に昇進され勲六等に功五級の金鵄勲章と年金を賜つて退役となつた。嘗て戦地で戦友に誓つたことを思つて、廃兵や戦死者の孤児を慰める事業を志し、乃村少尉と二人で「あんころ餅屋」を始めた。当時の「東京ハーピー」に習志野の営庭で軍服の二将校の立売の画が載つたり万朝報に書かれたりした。やがて乃村少尉が離れ、毎日の酒保が週一回になり、事業に寄附するどころか赤字に四苦八苦、其上に店員の四人迄チブスで入院し最愛の小店員が死んでしまつた。家財の限り投げ出して猶足らず、何とか道がないかと占ひを廻り、浅草観音のみくじと迷ひ歩いた揚句、同郷の暁烏敏師を小石川の浩々洞に訪ねた。師は不在なので木場了本師に胸中を披瀝し、お話を聞かせてもらつた。師は更に夜中近角先生の宅に同道された。先生も布教旅行中で其儘になつた。木場師から年賀状で「確たる光明を認められたか」と警告を受けたので、早速一月七日（大正三年）近角先生を訪ねた所、先生御自身玄関にお出でになり、何も未だ申し上げぬのに「どうなさいました」と温いお言葉と共に「さあ」と手を取つていたはつて下された。その時「仏とは正にかくの如き御方か」と感じたと翁は云つて居られる。更に先生の云はれた要点を記して、

第一自分が助けらるべき筈のものが他を助けようとする事が間違ひであると摘発され。

第二に私が善き事と思ひ居た事が皆自己の為だつた事、今迄人を助けるとか、人の為とか、己が善き事が出来ると頼みにしてゐた金城鉄壁を根底より破壊され、全く己の立場を失ひ今迄の万事が間違ひであつた事を知らせて頂き、立場が一変し、この時既に空腹に食を得たかの心地して悠々先生の許を退く……と書かれてゐる。

其の後幾度か九段の説教所、求道学舎に先生を尋ねお話を聞かれた。「自分は言行不一致な偽りもの、如何な道理で助かるか」など疑問をもたれた。それが愈々機熟したのは三月十八日（土曜）九段の説教所での「虚仮真実」のお話を聞き「愈々私の行為一切が不実極まる事に裏書済みとなり、此上は愈々一秒間も捨て置く事の危険を感じ」身の一大事と翌日曜に求道学舎に参つた。

法話前に某信者の質問に対し、即下に先生は「仏の誓願はあたかも砂糖の甘きが如し」と仰せられた。「では唯甘き本願の有難やと信ずればよいのか」とも考へられ、何となく時期が切迫したやうに思はれた。

処が講話中「仏智不思議を信ずれば……のお言葉に気

がつき、身の屁理屈者、強情者、今迄理屈で信ずる気があつたからだ、自分で信ずる気があつたのが悪かつた、誠に済まなかつた……唯仏智不思議の有り難やと信ずる気になつた。有り難やと喜んだ其時、夢の如く幻の如く如来の方より、よく親心を信じてくれた、これで本望である、安心である、決定である、金剛心を得られたのであると、耳底に響き、今大悲の如来をば我々同様に善き事をすれば助けて下さる、此方より頼めば助けて下さるのであるとばかり信じて居たのが間違ひであつた。真に済まなんだ。何たる広大なるお慈悲かと感じた一刹那、総身一時に火が付きし如く、俄に全身発熱し、熱き涙が押し流れ、生れて初めての男泣き、外見も恥ぢず声あげて泣き叫んだ。

回顧すれば日露の役に九死に一生を得たことも真に仏のお蔭であり、昨年人生問題に突き当り目を醒し下されたことも、今善知識近角先生の教を蒙つたことも、唯仏智不思議と称名念仏申す次第であります。と述べて居られる。

三

それから橘地さんは跛ながら元気当るべからざる勢でした。この不思議な仏力の加護、これさへあれば如何に事業の上に困難が寄せ来ようとも、身が如何に不自由であらうとも、かかる業を持ち、悩む自分を飽くまで憐んで下されるお慈悲一つで行ける。人生恐ろしいものなしになつたのです。その後四五年で麻布材木町の店を立派に立て直ちせられた。

その頃私は二十三であつたらう。人生に悩んで先生のお話を聞きに行つてゐた。聞いてもわからず、ふら〳〵迷つては橘地さんの所へ行つた。暮の店ではちん餅搗きに国の若衆達が来てゐて忙しい。日に三十俵もの餅を搗くのである。一重ね二斗三斗のお供を作るのを始めて見た。それから毎年の様に暮のちん餅の手伝ひに行つた。多くは配達で五十枚ののし餅を深川の一又代議士へ荷車で曳いて行つたこと、時には中渋谷の坂で梶棒に撥ね揚げられて逆戻りしたこと、戸山ケ原から大久保に来て暮れたこと、車をひつくり返して泥んこ餅にして戻つて来たこともあつた。

今も時々思ひ出すのは、郷里に独りゐた父が家屋敷を売つて、私と巣鴨に住んだ。田舎で売つた金は昔の千円に足らぬものだつたらう。橘地さんに融通して頂き、父が毎月楽しみに利子を戴きにあがる。その頃橘地さんは店を弟の藤原さんに任せて小石川雑司ケ谷の桂雲寺の前に住んで居られた。私は巣鴨折戸で大塚終点から電車で十分位の所である。父は電車より歩く方がよいらしく、草鞋をはいて来たとのこと、時にどう迷つたか半日かゝつたと語つたさうである。私の少年の頃父は声がよく唄をよくうたひ、又尺八をよく吹いた。或時橘地さんの奥様が琴を弾いて居られ

た所へ行つた由である。「奥様それは何でござんすか…」「これは越後獅子」「左様でごわすか。私の小さい時越後地震つて三条今町が引繰り返つた恐ろしいことでごわした」と、とんちんかんを云つたらしい。

その父も巣鴨で一年、到々いけなくなつた。父は七十四で永らく他力真宗の法門を聞いたのであるが、愈々死ぬとなると先が真暗闇で全く淋しいだけといふ。私はその前の年、初めて念仏が判り安心させて頂いた。父に報いるのはこれ一つだと思つた。「お父さん、あんたは一生碌なことしなかつたね。いよ〳〵死ぬとなると念仏も信心も判らなくなつて真暗で淋しい丈だらう。くら闇に落ちて行くのが可哀想でどこどこ迄もついて行つてやらうと仰しやる。仏とはその方ですよ。地獄だつてどこだつて可哀想に思つてついて来て下さる方、そした方が一人あればよいぢやないかね。」といつた。「あゝさうか、この真暗闇のわしについて行つて遣らうといふのか、有り難いなあ。」と合掌して念仏を唱へたのであつた。

父は愈々意識を失ひ、息も愈々絶えさうである。常音先生に電話し、橘地さんへと電車で行つた。翁はまだ床に居られた。「君朝飯前だらう、一緒に食べよ。わしも行くから」とのことで食事を共にし、然も歩いて大塚へと向つた。終点に青島で分取つたタンクの四五台、初めてのタンクを見とれ、臨終迫る親爺を忘れて居た。家に近づくと近所の人がお悔みをいふ。変だと思つて駈けて入ると「一時間位前に息を引き取つた。」と常音先生が来てゐて言はれた。先生の来て下された時、息がつまつて、ぶく〳〵泡ふくを吹いて居り、先生が医者を呼んで下されたが駄目だつたといはれた。よく橘地さんと常音先生とがその事を話して笑はれた。

四

元々自分には宗教の要がないと思つてゐた翁が、計らずも限りなき仏のお慈悲に遇つて今迄の自我の是非曲直の突張りが解け、念仏のみが未通つた誠であることがわかり、全く念仏の一道となつた。如何なる無宗教の人、自分が善だ、正しいと思つてゐる人、又自分がとても駄目だと悩んでゐる人も生きとし生ける人の凡てが、この仏のお慈悲に目醒め、自分の様に人生に偉大な光明に恵まれ得るものだ、との一大確心から人を捉へてはこの他力念仏によるべきだと説かれた。跛を曳きながら知人にこれを説きよく深夜に至つた。その逆り出る熱誠にほだされて、どれ程の人々が信仰に引き入れられた事であらうか、恐らく百数十に上ることであらう。

然し人間の涯しない欲情と迷ひに見切りのついた翁も、時に持前の欲や人情に迷はされた。耳よりの話を持ち込まれて乗りかゝつては、常観先生に聞かれた。先生は「人生に桁はづれの話は危険だ。世に不思議といふは仏のお慈悲一つだ。欲に引かれると泥沼に堕ちて悩む。君がそれを引き上げて頂いたのでないか、摂取不捨とは欲に走るものを引き止めて下されるお心だ」と聞かされては「あゝさうであつた、持前の業は恐ろしいものだ」と念仏に立ち帰られるのであつた。又情の濃やかな翁は人情に引かれて同様のことが屢々であつた。悩んでは、また初一念に立ち帰つて念仏されるのであつた。又情の濃やかな人の通有であるところの執着、それが強かつた。ふと感じたことが仲々根を引いた。その根がなか〳〵切れず、その為に人から執念な人だと思はれたりもした。それも念仏に立ち戻つては切れ、ふつと生き帰られる有様であつた。或る日曜、先生の講話の帰りに「今朝ハンケチを失つた。どうも気持の悪いものだなあ」といはれたこともあり、真面目で几帳面な翁は或る夕刻お店の帳場で「帳尻が合わぬのでどうも気になつて」と僅かの相違を調べ直して居られた。気の弱い次女についても、行く先きを気にして居られるなど情愛に悩まれるだけ仏の恵に涙を流された。

翁は入信以来常観先生の御講話を欠かされることはなかつた。常に求道会館の受付役として、入口に席を占め、冬はストーブに石炭をつぎながらお話を聞き、いかにも嬉しさうに涙一ぱい溜め、壇の先生のお顔を貪る様に仰いで聞き呆れて居られた。執着が深く業が深いだけ、先生の一語々々を頷いて聞いて居られた。御講話が終つた時は、目を赤くし、然もいかにも嬉しく心の埃の洗はれた、清々したお顔をして居られた。私も同じですが、共々先生のお話のみによつて、生活中の心の溝泥がこき流されるのです。

先生が「いかに泥水が多くとも清浄の仏の憐みの水がどれだけでも〳〵、永却に尽くることなく注いで下されたら、いかに泥が深からう共澄ませずんば止まない。泥の深いことを心配すな」と感極まつて云はれた時など共に涙を止めどなく咽び泣きしたのである。

翁は昭和十六年末常観先生の御逝去後から大層老いられたなあと思ふのであつた。大戦が烈しくなり、米機が東京の空を脅す様になり、翁の体も都では堪へられぬやうになり、加賀に疎開を決意された。恐らく十八年の春と思はれる。麻布市材木町の「あんころ餅」の看板も引払つて弟の藤原さん同道で松任に帰られた。

続く

汚れたる身にしあれどもきよめそそぐ
水絶えざればわれはやすけし

波岡茂輝詠

心に刻まれたことども

花田正夫

釈尊は或日、

「自分は農夫である。朝に夕に人々の心の田を耕やし、培ひ、雑草を抜き、菩提の種を蒔き、水を注ぎ、肥糧を施してゐる」

と語られてゐる。煩悩具足の我等凡夫は、農夫としての仏陀の御慈育を蒙ることなくしては、信ずる心も、念ずる心も起り得やうのない者である。

瞑目一番、私の上に被る仏陀の徳光を、あらゆる御縁を通して感佩し、その一端を心に浮ぶまゝに誌す。

亡き父に会ふ名所

私の右手の拇持が曲つて不自由である。これは小学生の頃一寸した傷がもとで膿を持ち、切開して貰つたが、すでに時期を失してゐて、筋が引きつつて了つたのである。

医師からは術なしと宣告せられたけれど、村役場から帰つた父が、夕食後に何日も何日もこの不自由な指をマッサージして呉れた。

その父は逝つて卅余年、然しこの不自由な拇指を見る毎に父の面影が浮ぶ。今ではこの不具な拇指が父に会ふよい名所となつた。それと共に煩悩の泥田に咲く蓮華の尊さを憶うてやまぬ。

毒を海に流せ

私の伯父は笠岡市で医師をしてゐた。私が中学生の頃、海水浴をかねて伯父の家に泊つてゐた。当時有島武郎氏の自殺がやかましく報道せられてゐたが、何を思つたのか私を診察室に呼んで、コップを手にしながら

「ここに一杯の毒があるとする。これを飲むと生命はないが、この毒をそのまゝ海に注ぎ入れると、毒がそのまま毒の仇きを失つて了ふ。」

と言つて、それからさも嬉しさうに

「有島さんは理想の破滅から、自殺したが、わしはその毒を消してもらへる大きな海を知らされてゐるよ。お前も早くその大海を発見せよ……」

と告げてくれ、大きな謎を与へられた。

地球を動かすには

矢張り伯父の家でのことであつた。腕白小僧の中学生が数人集つて、西瓜の御馳走になつて居た時、外診から帰つた伯父が、汗をふきながら

「お前達にメンタルテストをしてやらう。問題は、地球を動かすには一体どうしたらよいか、といふことだ」

私共はとてつもない伯父の質問にあつて、呆然としてゐると、

「地球外の一点に縄をつけて引張るのだ。地球上に居ては地球は動かせぬ。如何に大力な人でも、自分が座布団の上に居て、座布団を動かすことは出来ない様に」

と独白して、西瓜をおいしさうに食べてゐた。

諸君を紳士としてあつかふ。

六高に入学した時、池山先生が担任であつた。宣誓式を終へて、教室で待つてゐると、先生が来られて

「諸君は選ばれてここに入学出来てお芽出度う。さて本年は私が諸君の担任となつた。諸君はいづれも優秀な人々だから、別にことごとしく取り立てゝ言ふこともない。今日から諸君を紳士としてあつかふ。

然し唯一つ聞いて貰ひたいことは、人生は何時も春風駘蕩とばかりは言へない。何時、いかなることがおこるかも知れないが、さうした時、思ひは余るやうな時には遠慮なく訪ねて来て話してくれ給へ。わたしの住居は何町の何寺の境内だから」

とだけ言はれて、サッサと教授室に弘揚げられた。

先生は人格者ですね

何かのことで池山先生の人格に心うたれた或日、学友の玉尾さん、北岡さんと一諸に先生をたづねた。その時

「私は沢山の先生に教へられましたが、先生のやうな人格者には初めてめぐりあひました」

と心から真面目に申上げると

「時々、君のやうに僕を人格者と言ふ人があるがね。然し、世間普通に、人格者と言ふのは、無力無能な、おとなしいお人よし、所謂、抹香も焚かず、と言ふ種類の人の渾名だ。さう云ふ意味の人格者としての資格は十分に持ち合せてゐるが、君の言ふ、真面目な意味では、からきし資格はない。それは誰れが何と言つてくれても、自分で自分の悪人さをよく知つてゐる。

ことに偽善にかけては名人で、世間から悪人と呼ばれる人々のことを聞くにつけて、自分ならもつとうまく、誰に

も気付かれない様にやつてのけるのに、と思ふことがある、全く我ながら呆れる程名手だ。

たゞね、一つ変つてゐる点を言へば、この偽善の名人がお念仏申してゐるといふことだけだよ」

と破顔微笑せられたことがある。

日光の照り返し

「お月様は真黒な塊りだよ。ただね、明月として夜空に皎々とした光を放つのは、太陽の光りをうけた、その照り返しなのだ。」と先生から承つたことがある。

うそのない人

歎異抄に心ひかれて、時々池山先生をおたづねしてゐた頃であつた。「、親鸞聖人といふ人は、微塵もうそを仰言らない方だよ。絶対信頼申すに足る人だよ」と、最も信頼する先生から聖人を紹介せられて、爾来、聖人の御言葉を読む上に大きな指針を頂いた。たとへば、聖人の御文で、自分に受けとれない箇所に出逢つても、これは自分がまだ足らぬから、と言ふ風に反省する機縁を恵まれた。ともすれば勝手な理屈をつけて、心の扉を閉ぢようとする私に、何時も心の戸を開いて下さつた。

今年は豊年だよ

六高で学生親鸞会を開いて、月々池山先生から歎異抄の講話をお聞きした。学期初めは五・六十人の会員が集つて、熱心に聞いてゐるが、寒くなり、忙しくなる三学期頃には出席者が段々減じて、遂には四・五人ほどになつた。

そこで先生に対して余りにも申訳がないといふので、私共数人が、恐縮しておわびしたら「今年は豊年だよ。信仰上の豊年だよ。三学期まで四・五人も残つたのは豊年だよ」と答へられた。これを聞いて、我々はホットしたのであるが、さて星霜去つて卅五年、先生もすでに亡くなられて二十年の今日、広島の田中克巳さん、四国の玉尾延忠さん、奈良の北岡行男さん、三重の渡辺紋一さん等々、今日同一念仏の縁を恵まれてゐる。それにつけても「今歳は豊年だよ」の御言葉は、あの時、一時的に我々を慰めて下さつた仮語ではなかつた、といよ〳〵知らされる。

この三人が大事だ

名古屋市の林高寺さんは毎朝三時から起きられて、本掌を荘厳して法話を続けられた。ところが或日、僅か三人の参詣であつた。そこで三人の同行が口を揃へて

「御院主さん。今朝は三人きりのお参りですから、御法話はやめて下さい。あんまり勿体ないですから……」

と申し出ると

「なーに。この三人が大切な人々だよ」

と言はれて、平素の通り懇切な御取り次ぎを頂いた。この事は次から次へと語り伝へられてゐる。

正信偈私解（二）

白井成充

正信偈の私解を記さうとして筆をとると、釈迦牟尼の御影が浮んでくる。

釈迦牟尼（シャカ族種の聖者の義）が此の世界に生まれいでたまうてから今は二千五百二十三年に当ると伝へられてゐる。其の長い年月に亘つて此の牟尼は億万無数の衆生を護り慰め救うてきてくだされたし、行く末も窺みなく其の御はたらきを続けゆきたまふであらう。此の牟尼はまことに永遠の仏の御あらはれであらせられた。私共は誰も皆此の牟尼の御徳の中にはぐくまれてゐるのである。

釈迦牟尼は、百花咲き競ふ春の苑に生まれ出でたまうた。その時、量り無き光明が天地に輝き亘り、常闇の国々をも照らし尽くした。又、妙なる楽の音が響き轟いて聾者の耳にも通ひ徹つに。まさに一切の衆生の歓天喜地の一時であつた。然るにこの歓喜の後僅か七日にして牟尼の母后摩耶夫人は早くも世を去つてしまはれた。人生の最大の悲痛の事がまさしく既に迫り来りまゐらせたのであつた。

此の悲しみは少年の胸に既に醒めてゐた。一樹の影に独り居りたまうたとき、頭上に垂れた枝の葉陰に一匹の小虫が匍うてゐたのを、偶ま飛んできた小鳥が忽ち啄んで去つてしまつた。生ある者は何故にこのように互に相食みあはねばならぬのであらうか、何故に敢て他の生命を奪ひ殺して自ら生きねばならぬのであらうか。少年の心は憂ひに沈んで樹陰から去つた。——是れはシッタルター太子を伝へる一つの齣である。

此の一齣には、人が己れの生を思ひ省みる時に如何にしてもぶつからずにはをられない問題が潜んでゐる。而も其は之を解かうとしても解くこと難き深き謎の如くである。人は何の為に生きねばならぬか、又、如何に生くべきであるか。人生の理想と歩むべき道とを問ふ此の謎は、ひとびと之に醒めると、解かれるまでは安らひ得ない。

シッタルター太子が、父王の城内に文武の学芸を修められた時も、城を去り諸方の仙聖に道を尋ねられた時も、そして終に独り山林にこもりて三昧に耽り苦行を錬られた時も、不断に問ひ尋ね求め証さうと努めたまうた所は究意して唯此の問題であつたと云ひ得るであらう。而して其が、最後に坐したまうた菩提樹下の仙聖道場に於いて群り襲ふ一切の魔障を悉く調へ伏はしめ了りて、御身を挙り御心を尽くして遺る隅無く、真実に解決せられた時、釈迦牟尼は即ち仏陀となられた、人間の世界に始めて仏陀が現はれたまうた。仏陀とは醒めたる人、覚者の義である。自ら道（法）を覚れる智慧の故に他をして等しく道を覚らしめずにはをられない慈悲に於いて仂きたまふ完き円けき人格である。此の如き仏陀が現れたまうた時、私共人間の世界に真実の智慧の光明が照りそめ、無明の暗が消え去る無碍の道が開かれたのである。

釈迦牟尼が仏と成られた時、御自の内に醒めたる円けき覚りに安んじて、「われは世の至尊、われは世の至賢、われは世の至善、」と宣べると共に、また広く世間をみそなはして、「奇なるかな、一切の衆生悉く仏性を有す」と叫ばれたと云はれる。御自ら覚り顕された仏は即ち是れ一切の衆生の究意の理想たると共に、一切の衆生が必ず此の理想を成り得ることを宣べ証したまうたのであらう。

仏と成られた後の或る日、仏陀は自ら省みて言うた。敬ひ依るべき所をもたないのは禍ひある。私は今や覚りによつて私に知られた法（道・真理）に依り、之に仕へ、之を敬うて生きよう。さうしてこそよく徳を修め、意を専にし、智慧に到り、解脱に到り、解脱の知見に到ることができるのだ。過去にあらはれたまうた諸仏も、未来にあらはれたまふ諸仏も、皆等しく此の如く、法に依り、法に仕へ、法を敬うて生きたまふのだ、云々。是れ仏陀が御自ら円けき覚りに住みたまふが故に、覚りに住み法に歩む者の心を明らかに告げて私共を教へ導いてくださる御語である。徳満ち解脱円かなる御身を以て愈よ自ら不断に徳を修め解脱を証さうとして曽て休まず歩みたまふ。其の御歩みの中に私共一切の衆生を悉く「我れと等しく異ること無き正覚に入れしめよう」と念じ励みたまふのである。過去現在未来三世の諸仏ひとしく同一の法を覚り、同一に諸仏を念じ衆生を念じたまふのである。

仏陀は曽て病に臥せる弟子バカリ比丘を訪れてさまざまに慰めたまうた。その問答の中に比丘の云ふよう「世尊よ、私は世尊にまみえたてまつるために世尊のみもとに参らうと長いこと思うてゐました。けれども私の身体にそれだけの力が無いので、お伺ひ申すことができないで、淋しうございました。」之に答へて、仏の言ふよう「バカリ

よ、私に会へないといつてそんなに淋しがらずとも宜いよ。バカリよ、このきたない身体を見て何にしようぞ。バカリよ、法を見る者こそ私を見るのだ、私を見るのは法を見るのだ。バカリよ、何故となれば、法を見ることにより て私を見、私を見ることによりて法を見るからなのだ。」

此の問題は、病に臥せる弟子と之を見舞ふ師との間になごやかな親愛としみじみとした敬虔の情とを以て交はされてゐる長い記録の一節であるが、之を読むと、此に浮び出る仏陀の影の中に、自ら法そのものと一如になつてしまつてをられる測るべからざる崇い徳がおのづから流れ出てゐることが思はれる。「法を見る者は私を見る、私を見る者は法を見る。」こんなに自身と法そのもの（三世諸仏の覚道）とが一つものになつてしまつてゐる事を、何のためらひもなく、淡々として氷の流れるように、語り得ることは、驚くべき事である。真に釈迦牟尼は現身にして即ち仏の法身たるを証し顕したまうた、人法一如の真理を証し示したまうたのである。（私は孔子が「十有五にして道に志し」た一念が徹つて「七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰えず」といふ境地に至られた事とおもひあはせる。）

盲ひた比丘が衣を繕ふために針に糸を通さうとしてゐた。仏陀は偶ま之を見、比丘のためにその糸を通してくだされた。其が仏陀であられたのに気がついて比丘は驚き恥ぢ、自分の雑事の為に貴い世尊を煩はせまつつたことをおわび申した、崇い徳に満ちておいでなさる御身に此のような雑事を為していただいて勿体ないと云つた。徳に満ちてゐる者でも怠ればその徳が減つてしまふ。今、おんみは私に徳を修めさせてくれたのだ、ありがたう。仏陀はかう言つて静かに去つて行かれた。（此の一項は今原典を見出し得ず、ただ私の記憶にまかせて記しましたので、言葉にまちがひがありませう、意味にはまちがひがないつもりです、後で調べます。）

徳に満ちてゐる者は不断に徳を修める。その修めるのは、火が自ら燃え、水が自ら流れる如くに、たゞ徳そのものゝ自然の動きであらう。三世諸仏の法そのものを覚り証し、法そのものとなつてをられる仏陀の動きは、身口意の三業挙げて、始も中も終も常に善く、随つて一切の衆生を縁に応じて迷ひの道から救ひあげて覚りの道の中に転入せしめたまふ。是れ仏法力の自然である。此の自然は、仏陀が証りたまへる法そのものの本来の性の動きなのであつて、随つて一切の衆生、ひとりとして此の自然のはたらきを被りてゐないものはない。鴦屈摩羅も提婆達多も阿闍世王も善星比丘も、罪深く悪重く、愛欲に狂ひ、名利に燃え、法を謗り道を汚すいかなる衆生も、ひとりのこらず之に値ひて救はれていつたし、又救はれていくのである。

上に記した仏陀の言葉、「奇なるかな、一切の衆生悉く仏性を有す」（或は「如来の智慧徳相を具ふ」）といふのは、釈迦牟尼の菩提樹下にて到達したまうた仏陀の智慧の照らし明かしたまふ真理である。その真理は仏陀の智慧が、一切の衆生の、煩悩に燃え罪悪に苦しみて悪道から脱るるに由無き姿を、照らしみそなはしたまうた刹那に、即ち、それら苦悩の衆生を悲しみ愍みて、必ず救ふと誓ひたゝせたまうた一念の中に、証された真理である。仏陀の智慧が衆生の煩悩に触れて動きいだし、其の苦悩を救ふ慈悲として仂きたまふ刹那に、自ら証されたる真理である。其故に此の真理の中に私共煩悩の悪人が安らはせていたゞき得るのである。

此の如き仏陀の智慧即ち慈悲なる境地を「一子地」と呼ぶ。一子地といふ語は、逆悪の阿闍世王を救ひ、善根を断ちて地獄に堕ちた善星比丘を救ひたまふ仏陀の大慈悲を述べたまへる『涅槃経』に於いて頻りに用ひられた語であり、仏陀の証したまへる大智大悲の心境を表しまつれる語である。此の語を親鸞聖人は和讃に用ひ、「三界の衆生をわがひとりごとおもふことを得ること」を云ふのであると釈してをられる。仏陀の覚りの智慧に於いて、三界（即ち地獄・餓鬼・畜生の三悪道）に迷ひ悩む一切の衆生を、ひとりのこらず、吾が一人子と知ろしめす、その刹那にこの一人子を必ず吾れと等しき覚りの境に入らしめ安らはしめんとの慈悲心が動く。其故に仏陀の一子地に摂められて、私共一人一人が皆各々仏陀の一人子なのである。衆生各々が苦しんでゐる、悉く是れ如来一人の苦しみであると云はれる。一子地といふ語は限り無くありがたい。

此の如き語を用ひて始めて示し得た仏陀の徳を釈迦牟尼は現身に於いて覚り顕し、而して私共に久遠の仏の法身のまします事を告げ知らしめたまうた。譬へば、電気の流れは地球の生りいでた初から流れてゐたのであるが、エヂソンが世に生れて始めて之を知り、電灯を点しラヂオを伝へるようになつた如く、法界に遍く満てる久遠の仏の御身を釈迦牟尼が始めて私共に顕し伝へてくだされた。釈迦牟尼の説きたまうた教は恰も電灯の光やラヂオの音が電流の表現である如く其の本源に常にましまし不断に仂きたまふ久遠の仏の法身そのものを私共に伝へ知らしめてくださる表現なのである。是れ現身の仏たる釈迦牟尼の御はたらきであるが、然し現身の仏が法身の仏を表し現してくださる、其の御はたらきの始中終総べて是れ私共にとりては報身の阿弥陀仏のなさしめたまふところ、即ち南無阿弥陀仏の御めぐみたるに他ならない。（此の義は後に述べます。）

釈迦牟尼の御降誕にあたりて照り亙りたる光明は今も闇の世を照らし、鳴り響きたる楽の音は現に聾者の耳にも徹

つてくる。南無阿弥陀仏の御めぐみの故である。宝寿八十年、人の世の無常を告げてクシナーラの林の中に滅を示したまうた時、天界の聖母摩耶夫人を始め人も鳥獣も草木も悉く挙りて悲しみ歎き、御別れを惜しみまゐらせた。一子地の御徳に潤はしめられたる故である。然も無常を歎く涙は、人の世の窮み無き限り常に新たに、一子地より注がれる大悲の御涙に融かされて久遠の仏身に摂め取られ、常楽の覚りに安らひ励むを得しめられる。南無阿弥陀仏の御めぐみの故である。

一子地を証して南無阿弥陀仏をめぐませたまふ。釈迦牟尼仏の御生涯をしのびまゐらせて、私共の生くる所以の理想と歩むべき道との既に明らかに解き示されたるを覚え、敬ひ慕ひ、無窮の鴻恩を感謝したてまつる。

（四月十九日）

◇　◇

仏の言はく、「心を不要なることに放ちて命を尽くすことなく、覚の花の精を食ひて道の果を成じ、ついで世をしてなべて此の果に飽かしめよ。」

（多田鼎『仏伝涅槃篇』九二頁）

成徳院光沢抄

中島彰悟撰

十劫成仏の弥陀か、久遠の弥陀如来か。それは御本書の上では明らかでないが、御晩年はます〳〵御反省が深まらせられ、曠劫流転の久しきを思ひ浮べて、十劫以来の御憐みくらゐではない。これは久遠劫来の善巧の方便があればこそと、御自省の深重なる御感じが久遠の弥陀をあこがれ給ふこととなつたのである。

○

我が身の罪悪を知るだけなら、自殺か自棄となるだけ。光明の御催しをうけ、我が身の浅間しさが知れ、自力のすたつたが機の深信である。

○

称我名字と願じつゝと云ふ時は、我と云ふ字に気をつけよ。どういふ仏であるかと、仏願に目をつけ、汝の親であるぞ、母と呼べとある御慈悲をいただくのである。

○

信心は如来の決定心から発起す。如来の御手まはしの丈夫さを聞け。

編集後記

聖人の七百回忌が近づくにつれ、国をあげて祖師をお慕ひする声が次第に大きく強く響いて来ました。そして雑誌に単行本に、聖人のものが巷間に氾乱して参りました。

ことに四月、五月と、祖師の降誕会が催されて、随所に讃仰の催しがあります。さて、先日もフト想つたのでありますが、日本に沢山偉い人、賢人、徳者といふ方も出られましたけれども、降誕を祝する人は独り親鸞聖人のみである。世界の上では釈尊と基督の二人があるが、日本では聖人お一人である。

憶ふに、生存中は誕生日を祝ふけれど、死後までそれを祝ふのは、その人々が死を越えて居られるからである。聖人滅後七百年の今日、沢山の人々が心の闇を破られ、苦悩の障碍をとかされ、そこに限りなきいのちと、はかりないひかりを頂く、生ける聖人の生命を受ける。この事実がやがて降誕をお祝ひ申す根本となるのであります。

我等この降誕会の聖月に、生ける聖人の御心に触れ、そこに新生のよろこびを頂き「その一人は親鸞なり」の慈心に温められ、そこに無限の力を頂きませう。

× × ×

△近角先生、福島先生の御原稿は、前回の続きを頂きました。ことに御懇篤な先生方の御言葉は、至れり尽くせりの金言であります。活眼をもつて御味読願ひます。

△橘地翁の原稿は、草原誌と大世界に出ましたものでありますが、柳瀬様が更に本誌のために添削して下さり、且は御病中の御写真まで頂けましたことは有難いことでありました。御遺族の特別な御配意を忝く頂きました。

△曰井先生の正信偈は、序説として、大聖釈尊の尊容を浮彫して下さいました。私共のすぐそばに、釈尊が身をよせて、御教化頂ける思ひが致します。

△心に刻まれたことども、は私の心を養ひつづけて下さつてゐる、耳底録を再現いたしました。回を重ねて誌させて頂きませう。

御案内

日曜例会。毎月第一、第二、第三日曜午后一時半。南区駈上町一丁目、一道会館。市電、新郊通一丁目下車。

○

毎月廿四日、教西寺法話会。午前午后。市電御器所通下車、桜花学園東側。

定価 一部 二十円（送共）
半年 百二十円（送共）
一年 二百四十円（送共）

編集・発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ二八

発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第十巻第三号 昭和三十三年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可